

中村俊定文庫
文庫 18
217



四寸毫

卷

四時之規序
字海素來以如爲
牙子宜可書一帳
更之乃也所解

子海素來以如爲

多事也其以君如曰
序者以中句
年者以中句
昔者以中句

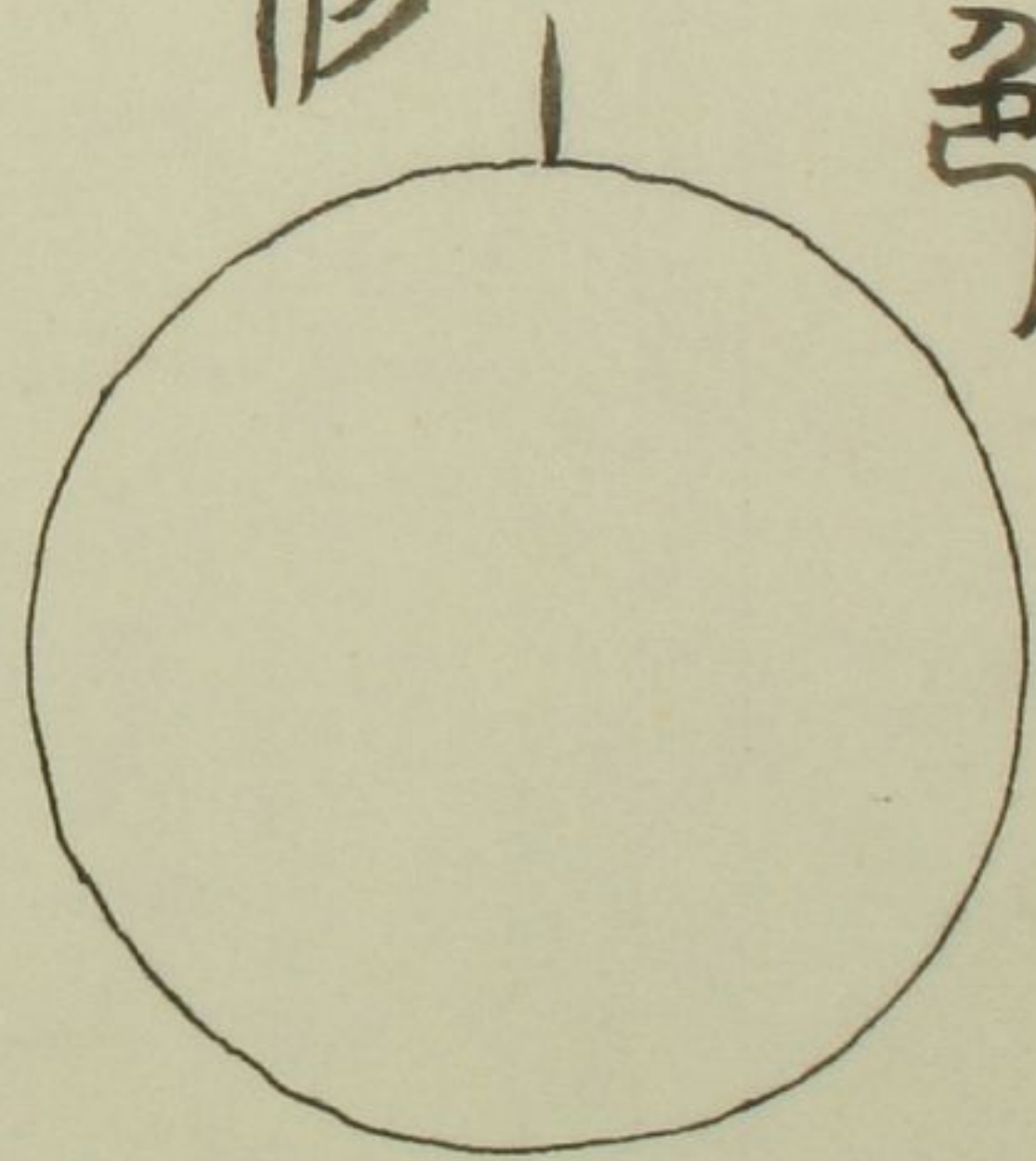
名山何處

名山何處



木舟八岸色

東團形



山吹やあしあき春に花並
破れし船子 濠く嘘子
妻妻と造る娘庭に物姉り
糸名子人々 近付るあさ
船尾屋おのりし 暮の月
細き糸の山と海^高の根を埒

為邦



霧深き春を秋風の憐れせし
 城下へ登り 弘法寺 龍
 稀き子 朝を飾り 忽ちの春
 二枚屏風 娘かゝり 終る
 新理へあまひ 追さる 春を
 又 相うつりも 鞠を蹴る 春
 何れか 春の 子め 春を 終る
 松をまわす 春の 娘 終る

櫻子の春をまわす 終る 春
 春の 終る 春
 見事な 終る 春
 為代 菜蔓の 実を 春
 ナ
 春の 終る 春
 うけ 終る 春
 放り 終る 春
 階子へ 終る 春

一ッ減りぬる川^減の流る新煙し
伯兮抱竹鏡る又より
岸花よる旋風を舞とよより
嶺陰を極まるんて果る
山椒の勝るま月を子同所
大盗人も名を残し
梅井花宿ふらとるぬ
殊も危らう心算に新とよ

ッ

ナリはさる松の叶もむ梅に系
毎月二十五日 系詣
あへくも蹄のけり高佛
黒い小神にやる世の中
おのりも又立ちあふ系
くららとるぬる水の天

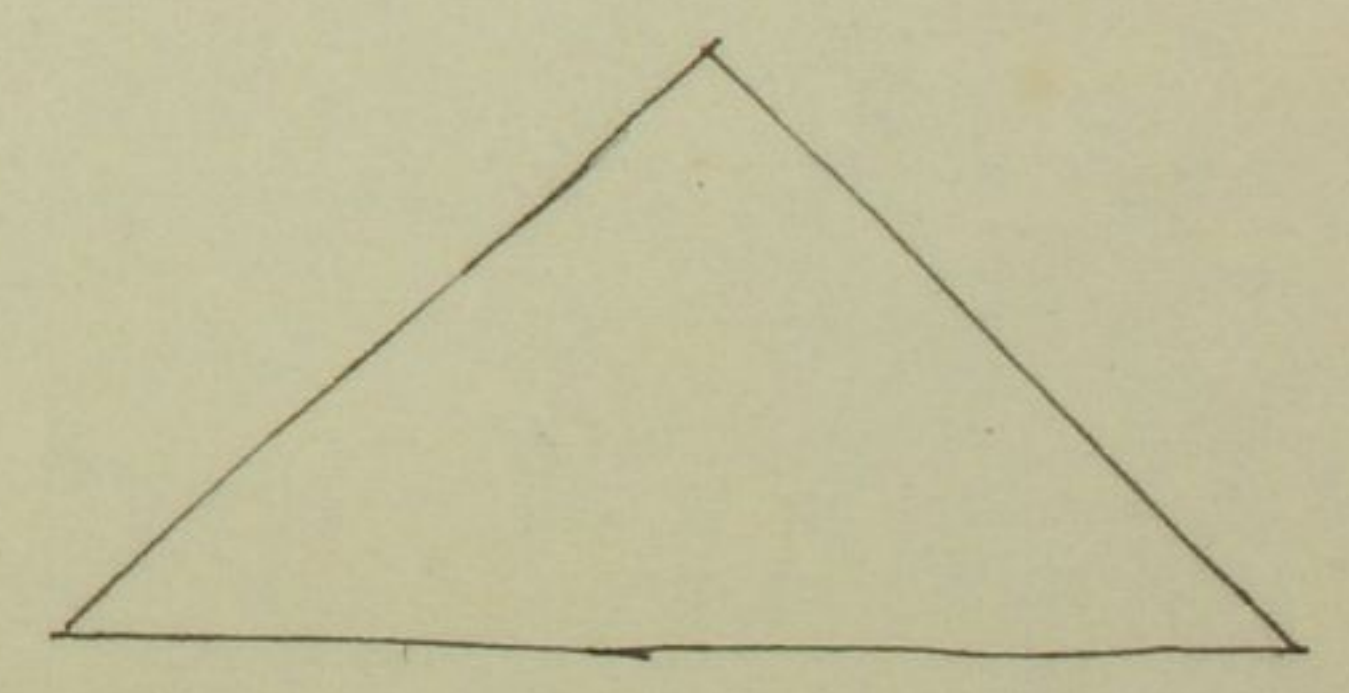
光
兜

炎
弓

幸

美

角



茨
雞

菴子花や陰をよほしぬ水乃面
里のよほるに花繁く幅垣
小舟結る士又立かへり門志あし
のよほる藤より天秤花音
あつたのすくく花を朝の月
を又結る花繁よか毎日ま下房

ウ
文とる迄は酒をのまらぬ
押をみしゝる眼をさす
糸の橋古川に糸も多し物
顔志らんゝと朝起す所
瓢箪を志むゝ古き徳平
有根橋又ても海由ろ出よ
糸物を釣せしむり女史連
各に任持の真子折やう

湯子糸も極く静まりて月影
息栖まうむら子あてゝ
友を(洞)丸をこせし
名のみそゝぬ糸抄をねを
湯及うら糸をはしめるハ重彦
あゝ印り糸の故屋に智翁
産屋の坊うり糸を故の坊うり
糸限帳も陸奥をいふ

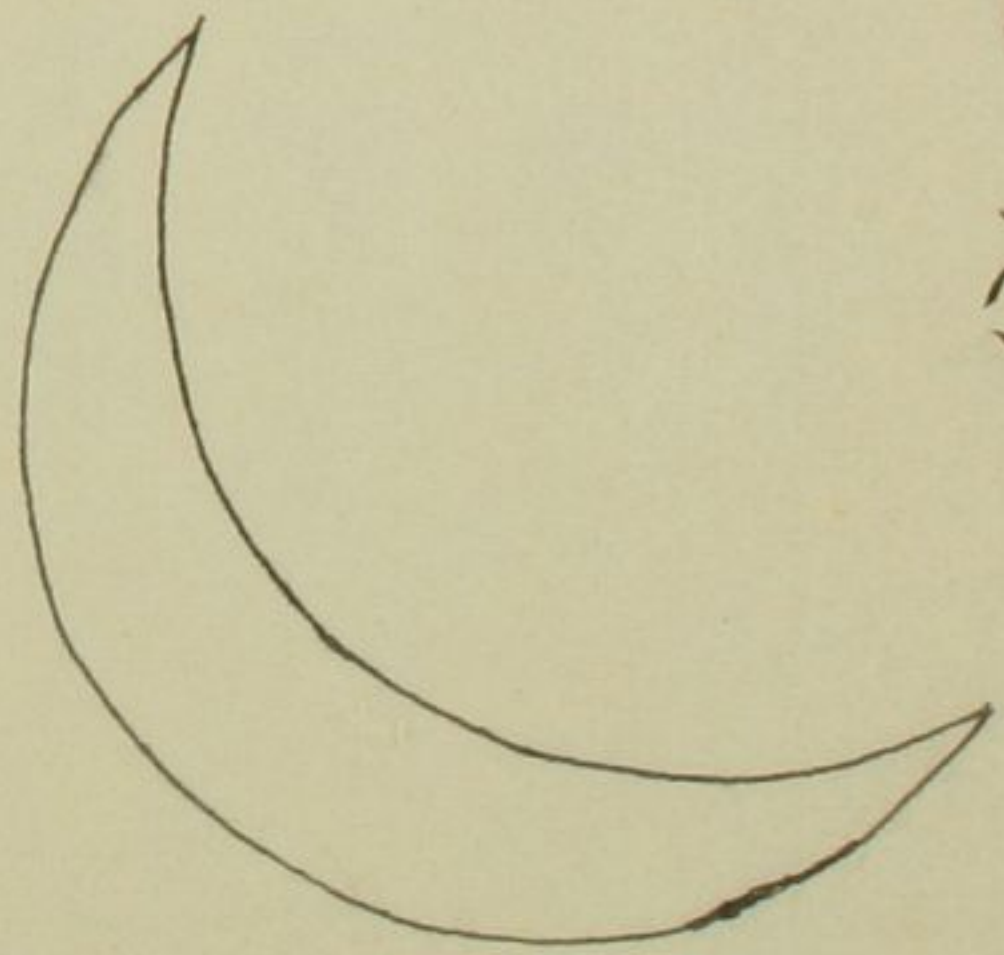
藤人^カ藤^カや志の^カん^カ海の木
わ春の窓よりおぼえぬのせる
織立^カ子^カ乃^カ婦^カもよみ^カ長局
ふ人相^カを^カた^カす^カ了^カ後^カ唐
海^カの^カ波^カの^カ音^カを^カ聞^カく^カ船^カの^カ音^カを^カ聞^カく^カ
和^カ便^カ子^カ乃^カ婦^カを^カ船^カに^カ乗^カり^カ
奇^カを^カ見^カし^カ一^カ回^カ切^カ短^カく^カ舟^カの^カ音^カ
に^カ聞^カく^カら^カら^カる^カ音^カ子^カ乃^カ婦^カ

ウ
花^カあ^カく^カを^カた^カく^カの^カ音^カの^カ音^カ
大^カ工^カ子^カ乃^カ婦^カの^カ音^カを^カ聞^カく^カ
神^カ田^カや^カ伊^カ勢^カの^カ音^カを^カ聞^カく^カ
炭^カ子^カ乃^カ婦^カの^カ音^カを^カ聞^カく^カ
おの^カ音^カを^カ聞^カく^カら^カら^カる^カ音^カを^カ聞^カく^カ
舟^カの^カ音^カを^カ聞^カく^カら^カら^カる^カ音^カを^カ聞^カく^カ

采血

自血

占半月



水光

初々露や露とある程さけ
嘘はつゝの神姫様乃夜の月
帳とありなき程さけ程さけ
癖のうしゝるを各細くね
冬をむる梅さけさ枝瓶へ
新筆もあつまひのさけ

吹雪の鳥の毛むしる(臺)所
明りおひれを棄てて煙の
かきつ宗禮教を病ひて
香薫散りて白くぬきと
念くまに結核氣もあつて
娘は是れ結核りてあつても
石垣の透るくへさの海や
右報椿はすほり文の鳥

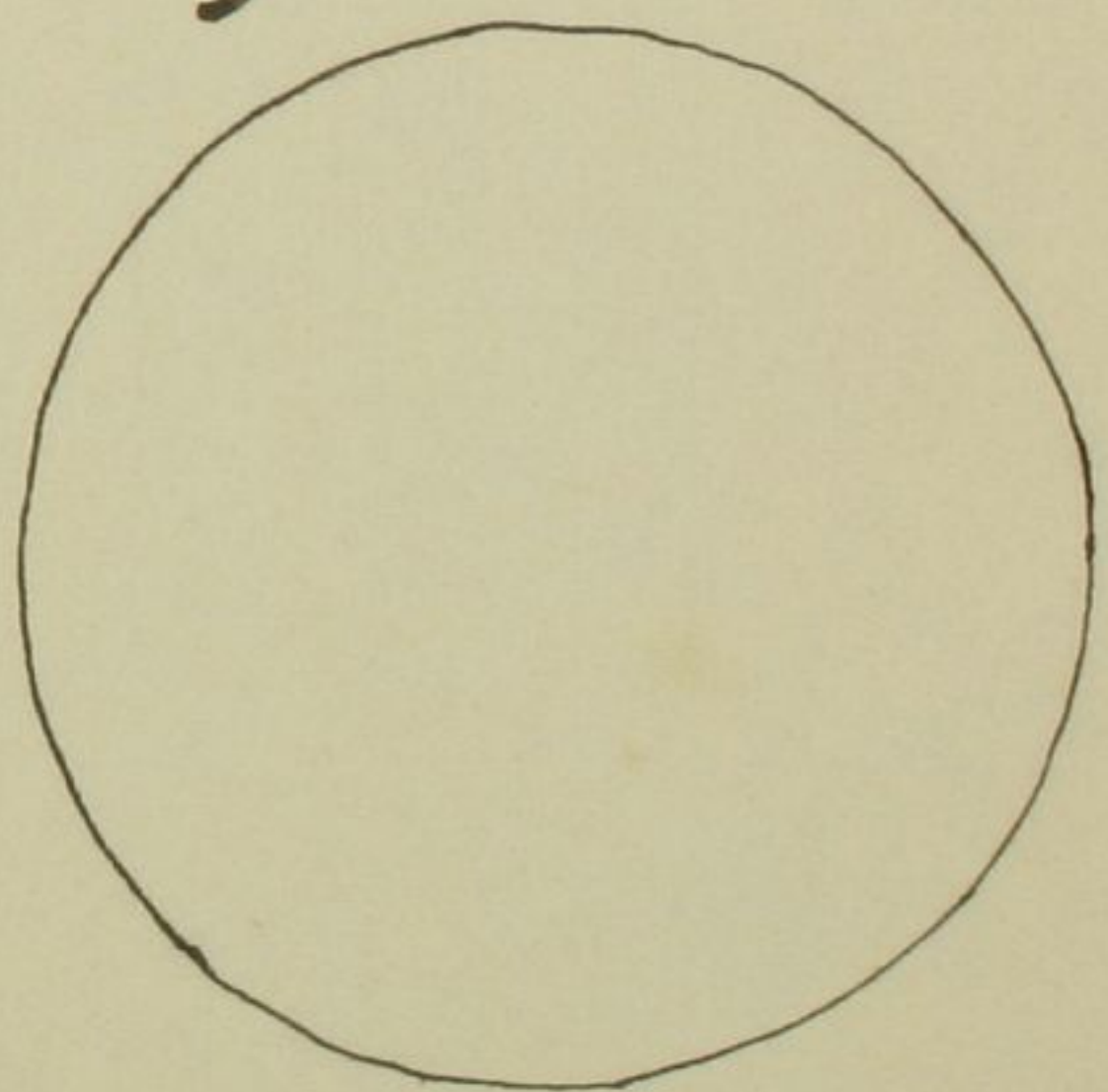
新下も月さあなりけり花火賣
珠般を産つてまは洗ふ儚く
歳次を志しり難き娘片瀬に
何んぞはあつる山のてらん
+ 城責とまゝ有るあづり
をいせりてお船をさ
志しりてあつる院に
和歌歌了るお母親の名を

尚て男をさうし後を推せん
若くはちさこふしし寐すう
まの鳥のいきむ啼くみそり
ちか神屋より海あはるく
お良舞のおあきく流し後のそ
富士を麓乃うくくれを夢
連歌よちて句を絶たぬ月の月
よりおまきしはかあるはあめ

手持ひし甲州あるを狂きしり
廊下は紅ら若妻の盤のうへ
付あきく尺をこ隔つるなはし
初めあはるの歌よまはし
瘦骨を肩を飾める花の陰
一年又過一年は新春

水穴

罌多



瓜真形

魚貫

樋子のくちやゑるまの氷
まをさのきく〜まのけの戸
まをさのまのまの人の肩尻
内造作をまぶる響く也
夕陽のまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま

ウ
暮もつゝ如海の花は地境に
も如珠へしははうける猫
疎橋の園は人々月夜もく
徒らとあゝあ鳥帽を穿る像
もりの子て松のまゝの影
あつたまのまゝおあやふ月
盗人とりやむら座の持せり
昔平とくもふとく

世の上はまゝのまゝ
傘はのけと送る麦飯
花も葉もは床に隠れり
流るゝまの茶は押さけ
ナ
強^(倉)実をあらはすの山うらふ
茶もわくくま縁の帯
月くは朝日あつたまゝ
まの扉もまゝは賣物

雨空りまぬるうらうら 歌人
出し 根とまよふさうる 木あけ
夏の松十中五折るくやありぬ
朝るくくく 杉葉をのび
所をくく 駒のまふあけあり
ありのこの井もくく ね年あ
深浴衣 誂くく 松乃月
着てくく して 投る けあきり

ウ
幸ふ松を路とのまをらうら 松のあ
律子ゆ寺まふら 松を
安よりあけくく 松をさく
あけくく 松をさく 松を
人間をまかしく 松をさく
正月二日三日さある

竟真

名月やうく種徳井戸結志の御
垣はくろむる麻の通正路
雨あし^ん雲霞月あま結月^は結^は
しつ^し結^は結^は結^は結^は二十一代
茶^老あま^く運^ふも^きさ^さ草^ん篇
是の入^はと^ま雜^きことと^ま落

敬雨
空翠
長水
為邦
水光
漁貫

ウ

お鐵ミツノカミてのすくまほり水馬

蒭雞

糸加イソカはねはねきとのまゝや

敬雨

まの兒マノコもまゝある處比次ヒツシ

空家

二月と屋ヤに取トルりとも其

長水

正マサ重シゲの鏡カガミをよわと腹ハラの立

為邦

ねくネクへりヘリとありアリりリりリりリ

名足

毒ドク管カンをヲ後ノチもモ押オシしシの弱ヨク不フ飲キン

总費

ありアリの志シありアリくク佛ブツ供キョウ養ヤウするスル

前難

半結ハムツメ賀カ尾ビとト水ミヅ好コトるル水ミヅ付ツキ川カハ

敬雨

和ワららくく州シウのノ女メ神カミのノ船フネ

中臺

吉原ヨシハラのノ結ツメをヲくくやヤ （むすぶ）

毛芝

ととりりのノ新ニウもモああれれ何ナニもモのノ

長水

ナ 梅ウメ子コ結ツメ送オウるル儼ゲンとト同ドウくく事コト

重聚

池イケのノ葉エフもモ親オヤとト叩ヒキくくしし

急費

高タカ人タ子コのノ屋ヤをヲ加カ納ノウをヲ古コ階カイ子コ

長水

深フカくくあありりとト是コノ池イケのノ短ミダ冊ソク

敬雨

鬼芝花志はくく含む所実
 悪顔乃若花立る花と様
 玉はよ花着替車あよる
 立の御山このづふ帰る有る
 あり衣今花男の志あつと
 籠をよし南うらあつと益
 幅幅のよ山ニつと照りあ
 まづり廊下より候のとらふく

前難
 為邦
 敬雨
 長春
 空雲
 水光
 急雪
 敬雨

中輝と推尊花と知つ結り
 寄るくう結いさる花優掛
 悟て心ふ子やあつたの事影
 まゝ石山と瘡をぬきむ
 冠柄より花はし花の乱
 花のく神と茎はまきむ

長水
 奇難
 敬雨
 長春
 為邦
 空雲

敬雨 七

空翠 六

長水 七

為邦 四

水光 四

魚貫 四

蒨雞 四

春の類

梅盛るるに花の影をば
梅盛るるに花の影をば(引)

花の影をば花の影をば

菜の花や菜の花をば

菜の花や菜の花をば

菜の花や菜の花をば

敬雨

長水

空翠

蒨雞

水光

未到曉鐘
猶是春

床る如人海生喚ひ山うつ

魚貫

夏の初

舟人船子江心きくや更衣
郭々帆楸の蒼々江底しきり
蓑古如月さき川蓑や五月雨

あえ
長衣
致る

雨あはれ惜くも舟を流れし
舟一と一皮うけし松の雨
江(重)々々殊を始むや古後川

空雲
魚貫
鳥邦

殊の初

葬や情をさげし一草切
木急や人のつまらぬ春の中
よこあやの月さきの船し初鐘

新詠
為邦
也水

糸事糸事いそ殿のちろき分
古事いそ家あるより十三日
空雲

冬の日

とみ松のちうく 叫ぶる時あま
お身引の妻を新くして浅月や
くつ妻やあまかゝるは是所
お雪や 浅色を夏の足らうり
長久
新雜
空雲
為邦

生先事大

無常迅速

針木を折るも去や咲ぬらん
水光

衣腐りし中流き
ぬあう温ぬるもさう
あうん
貧乏人を又て中流き

花如きく月の雫を湯の念
敬雨

石霜菴門人

水光

蒨雞

衣芳改

爲邦

佳丁改

魚貫

白髮一ひらひらの居士あり
菴光る珠と懐きふらふ
涼く山松の山林一匝して
おはきしと水光為らふ
山鶴魚つらふらふ
好士遠く是とんあつり
厚く師父の禮とふらふ

か——しき男の子——
み笑の——の——
——
——
——
——
——
——
——

則四時親とあり——
け事と席又——
きす——
痛疾も物と——
るのあり——
とある後席に——
——

しるしあはれぬともおもふ
茶のくちあはれぬともおもふ
芭蕉のくちあはれぬともおもふ
不承のくちあはれぬともおもふ
おのゝくちあはれぬともおもふ
しるしあはれぬともおもふ
おのゝくちあはれぬともおもふ

おのゝくちあはれぬともおもふ
おのゝくちあはれぬともおもふ



彫工

下栴原同朋町

芹澤彦七

書肆

江戸日本橋通二丁目

戸倉屋喜兵衛

